

インドネシア・アチェ州におけるサイクロン・センヤール被災地域内の障がい者対象現地調査 をしました（2026/2/3～7）

テーマ：サイクロン・センヤール、洪水災害、障害、脆弱性、インドネシア

場所：インドネシア、アチェ州

センヤール・サイクロンによるアチェ州での洪水（2025年～現在）に対応するため、東北大学災害科学国際研究所のボレー・ペンメレン・セバスチャン准教授（インクルーシブ防災学分野）と朴慧晶助教（災害医療国際協力学分野）は、アルフィ・ラーマン博士（シア・クアラ大学）およびアフマド氏（カファラ・インドネシア）と共同で予備調査を実施しました。

視察中、チームは現地の災害対策機関（Badan Penanggulangan Bencana Aceh, BPBA）の代表者やインドネシアの緊急対応チーム（BASARNAS）のリーダーとも面会し、緊急対応活動や早期復旧への移行について深い知見を得ました。この視察は、洪水による社会的影響、特に周縁化された人々への影響を評価し、この地域の長い災害の歴史の中で現在の危機を位置づけることを目的としていました。

洪水により州全域で広範囲かつ繰り返しの停電が発生しました。約100万世帯が一時的に電力供給を喪失し、一部では長期に及びました。復旧は徐々に進んだものの、繰り返す洪水はインフラの脆弱性を露呈し、地域社会間の対応能力の格差を浮き彫りにしました。燃料へのアクセス制限は、移動手段と対応努力をさらに制約しました。

現地調査の中核をなしたのは、障がいのある方への詳細なインタビューでした。これらのインタビューでは、避難の困難さ、避難所のアクセシビリティ、情報へのアクセス、ケア・支援システムの混乱など、洪水の実体験が記録されました。参加者には過去の災害（特に2004年のインド洋津波）を振り返り、それらの経験が現在のリスク認識、防災準備、制度への信頼にどう影響したかについても考察を求めました。

調査結果は、避難支援における障壁、避難所の環境アクセシビリティ不足、通信障害、非公式ネットワークへの過度の依存といった構造的問題が繰り返し生じていることを浮き彫りにしました。同時に、回答者は危機的状況下での安全と尊厳の確保において、家族、近隣住民、宗教コミュニティ、地域団体が果たす重要な役割を強調しました。これらの知見は、包括的な災害計画・対応枠組みにおける持続的な格差を示唆しています。

本調査は包括的防災（i-DRR）の中核原則、すなわち災害はハザード・曝露・社会的脆弱性の相互作用によって生じるということを再確認しました。アチェ洪水は、既存の社会経済的不平等と排除のパターンが災害結果を大きく左右することを示しました。また、周縁化された人々の声と経験を防災・対応・復興戦略に統合することの重要性を明らかにしました。

本共同研究は、インドネシアにおける包括的災害ガバナンス強化の継続的取り組みに貢献するとともに、当研究所とアチェの地域関係者との長期的な学術・機関間連携の深化に寄与するものです。

関連文献と現地分析：

- Universitas Syiah Kuala, “Senyar Aceh” Flood Monitoring and Analysis Platform:
<https://senyar-aceh.usk.ac.id/>
- Rahman, A., “Ingatan Tsunami, Ujian Senyar: Bagaimana Memaksimalkan Peran Kampus dalam Situasi Bencana,” The Conversation Indonesia:
<https://theconversation.com/ingatan-tsunami-ujian-senyar-bagaimana-memaksimalkan-peran-kampus-dalam-situasi-bencana-271629>

文責：ボレー・セバスチャン・P.（インクルーシブ防災学分野）
朴 慧晶（災害医療国際協力学分野）

（次頁へつづく）



北アチェ州セニヤールから2か月後、
ピディ・ジャヤで浸水した家屋



被災地のRSUDピディエ・ジャヤ病院を訪問



北アチェ州セニヤールから2か月後、
ピディ・ジャヤで浸水した家屋



カファラ・インドネシアと共に被災した障がいのある方々へのインタビューと救援物資の配布